

平成 29 年度 学内研究助成金 研究報告書

| | | |
|-----------|----------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 研 究 種 目 | <input type="checkbox"/> 奨励研究助成金 | <input checked="" type="checkbox"/> 研究成果刊行助成金 |
| | <input type="checkbox"/> 21 世紀研究開発奨励金 (共同研究助成金) | <input type="checkbox"/> 21 世紀教育開発奨励金 (教育推進研究助成金) |
| 研 究 課 題 名 | 『ぼくの演劇ゼミナール チューホフの遊び方、カフカの作り方』 | |
| 研究者所属・氏名 | 研究代表者：文芸学部 芸術学科 舞台芸術専攻 教授 松本修 共同研究者： | |

1. 研究目的・内容

現代日本演劇における「新劇＝リアリズム演劇」と「アングラ小劇場＝反リアリズム演劇」の相違する表現方法のそれぞれの意味と目的を明らかにし、両者に共通する「普遍的方法」というものがあるのかどうかを検証する。これまでに実践してきた私の「演出方法」「演技指導」を演劇の専門家のみならず、入門者・初心者にも、その内容を分かりやすく伝え、最終的に演劇の魅力、その中でも「演出」「演技」の重要性を明らかにする。

2. 研究経過及び成果

私の創作方法の特色・独自性とは、1960年代以降の「アングラ小劇場演劇」の影響を多大に受けつつも、演技の基本を「新劇」(日本で最も歴史のある新劇団の文学座)で学んだと言う経歴にある。私と同世代でこのような経歴をもつ演出家・俳優は存在しない。私は「新劇」とその進化形であるともいえる「アングラ小劇場」を体験し、両者の表現方法を融合させて、チューホフやカフカの作品を題材に、数々のオリジナル作品を創作してきた。

これらの創作の過程とその理念を論ずることは現代演劇研究に大きな意味を持つと考える。また、この研究を進める題材として19世紀から20世紀を代表する作家としてチューホフとカフカを用いたことは、結果的に「近代から現代の芸術表現」を考察することとなり、意義があったことと考える。

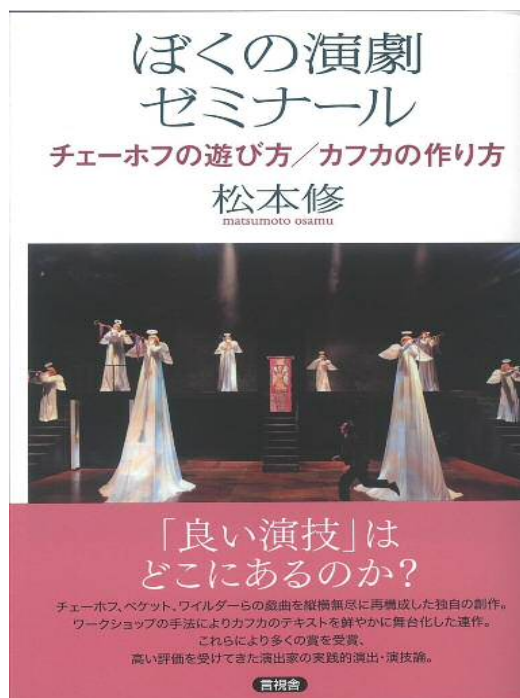
海外においては近代以降、研究者ではなく実作者(演出家・劇作家)による実践的な「演劇論」「演出・演技論」が多数発表されており、多く邦訳されてもいる。ここでいう「実践的な」とは、演劇の創作現場で役立つ、という意味である。古今の代表的な著作に『俳優の仕事』(スタニスラフスキー著)、『演劇論』(ブレヒト著)、『何もない空間』(ピーター・ブルック著)など大家によるものの他、数えきれないほどの「演出・演技論」が紹介されている。翻って我が国においては実作者(演出家・劇作家)による著作は、ごく僅かである。『内角の和』(鈴木忠志著)や『俳優になる方法』(山崎哲著)、『演劇入門』(平田オリザ著)など少数の著作のみである。この度、私がまとめようとしたのは、今挙げた鈴木氏、山崎氏、平田氏らと同時代に演劇創作を行い、彼らの影響を受けながらも、彼らとは違った方法論を確立してきた独自の「演出・演技論」であり、日本の現代演劇の多様性を証明するものであろうと自負している。

これまでの自身の演出作品およびその方法論を、他の演出家の演出作品と方法論と比較し、その相違点と共通点を明らかにし、そのことによって、私の「演出方法」「演技指導方法」の独自性を明確にできたのではないかと。

【書評より】

- ① 松本修という演出家が、作品に求められがちなテーマ性や社会性、分かりやすい物語性をできるだけ遠ざけてきたことが分かる。それら説明できるものは、表現が本来持つ可能性をどこかで狭めてしまうと考えるからだと思う。求める演技にしても、定型のスタイルや癖から自由になることが常に志向されてきた。演技をめぐる試行錯誤は、表現の可能性に開かれた自由を獲得するための闘いとさえ言える。(片岡義博・ジャーナリスト)

② これは読み言葉を通じての著書というかたちをとっているものの、主張や思想表現や理論家の言葉遣いではない。自称「非論理的」で、「青臭さ」に満ちた文章の語り口そのものが、この演出家の活動存在の在り方、つまり舞台の手触りであると同時に思想であると言える。小さなこの書物には、その時その時の現場の創造者の経験に根差した言葉である故に、重みがある。それに加えて松本らしく、誇張も驕りもなく正直に綴られ、教わることは大きい。(斎藤偕子・英米演劇研究者)



3. 本研究と関連した今後の研究計画

本書で触れられなかった「演技論」「演出論」が多くあった。その中でも特に下記についての研究つまり実際の上演作品と関連付けた記録と論考をまとめるべきと考えている。

- ◆チェーホフ、カフカ作品以外の演出について。(B・ブレヒト、T・ワイルダー、T・ウィリアムズ、S・ベケットなどの作品群)
- ◆日本の劇作家との共同作業に関して。(別役実、唐十郎、寺山修司など)
- ◆近松門左衛門作品の劇化について

今年度中に大まかな構成、プロットを考え、執筆に着手し、来年度(31年度)の学内研究助成金に再度、応募したいと考えている。

4. 成果の発表等

| 発表機関名 | 種類(著書・雑誌・口頭) | 発表年月日(予定を含む) |
|-------------------------------------|--------------|--------------|
| 全国の一般書店の芸術書コーナーにて販売。Amazon にても通信販売。 | 著書 | 2018年4月1日より |
| | | |
| | | |
| | | |